まんが的「住吉祭礼図屏風」の楽しみ方

メモ）鉄本　2023.04.03

「住吉祭礼図屏風」には往時の堺の殷賑が描かれています。この絵に親しみ中近世の堺を知るために「漫画風」に鑑賞してみたいと思います。屏風絵は次のアドレスで見ることができます。

URL:　商都・堺の富と祭り ―住吉祭礼図屏風― ― Google Arts & Culture

1. 前説

・この「住吉祭礼図」は、住吉大社の夏越大祓（なごしのおおはらい）という夏祭りの風景を描いています。
・夏祭りは、炎暑の夏に多い疫病・害虫・風水害をもたらす悪霊・疫神を鎮め、夏を無事に越すための祭です。
・夏越大祓では、毎年7月31日に茅の輪くぐりの神事を行い、8月1日に堺の宿院に神幸（しんこう）し、荒和大祓（あらにごのおおはらい）の神事を行います。神輿は14時30分に住吉大社を出発し、20時頃に堺の宿院に到着します。住吉大社から宿院まで約5kmの距離です。
・左隻は、住吉大社を出発して堺の宿院に向かう神幸の行列を描いています。
・右隻は、祭りを盛り上げる町衆による練物の行列と祭りを楽しむ堺の町の人々の様子を描いています。
・この屏風絵は、慶長年間（17世紀初頭）の堺のにぎやかな様子を描いています。
・では、近世初頭の堺の町を歩いてみましょう。

2. 渡御に注目して左隻を鑑賞

①先頭を行く猿田彦

【解説】猿田彦の役割には、「神迎え」と「先払い」の2つの側面がある。猿田彦は、鼻高・赤面の性的力と 眼光の「邪視」、そして、鉾によって悪を払いつつ 行列を先導する。
神幸の行列は、猿田彦を先頭に、社人、神官、斎、八乙女、神馬、アハラヤ、神輿が続く。

②暴れ馬

【解説】神官や社僧は馬に乗って神幸する。町の喧騒に馬は反応し易い。慣らしの訓練が無かった？

神幸には**神馬（しんめ）**も同行するが、祭礼図には描かれていない。画家が描き忘れたのか？

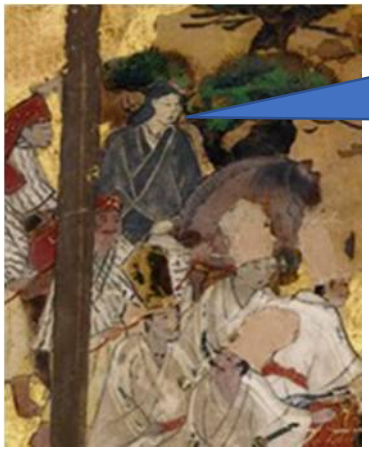
③落馬寸前の社僧

【解説】馬は乗り手の上手下手を敏感に感じるそうです。

④鷹匠と露天商

【解説】鷹匠は住吉大社境内でカラスやハトによる鳥害を防ぐために鷹を訓練する。

⑤アハラヤ？



【解説】アハラヤ（阿波羅耶）は、祓いを職掌とした巫女（通常14・5歳）。「アガチコ」、「アマガツ」とも呼ばれ、祓いの 依代とされた。
「アハラヤ」の音は「荒和（アラニゴ）大祓」から転訛したという説がある。

⑥斎女（いつきめ）

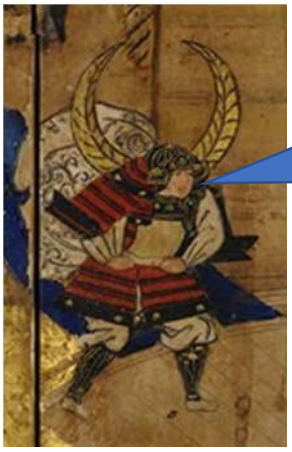
【解説】『住吉名勝図会』に描かれている「斎」は「屏風絵」には描かれていない。斎女は大阪平野区にある**赤留比売命（あかるひめのみこと）神社**の氏子の家から出され、堺宿院頓宮に神幸すると、桔梗の造花を奉納する。赤留比売命神社は住吉大社の末社でもあった。
＊左図は「住吉名勝図会」からの抜粋。

3. 練物と町衆に注目して右隻を鑑賞

行列は安立村（あんりゅうむら）から狭間川を越えて、「北之橋」から堺の町に入ります。ここで注目したいのは、草葺きの屋根です。住吉大社から安立村までに見られる草葺き屋根の家屋が堺には1軒もないことです。これは堺が裕福な町であったことを表しています。

草葺きには、茅、藁、麦わらなどが使われる。

①母衣武者姿



どや！　かっこ　えーやろう
段ボールで作ったんと
ちゃうで～

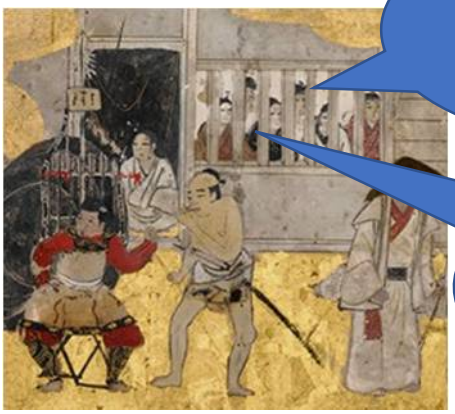
【解説】背中の袋のようなものを母衣（ほろ）という。鎧の背中につけて飾りとし、時に、流れ矢を防いだ武具の一つ。室町時代以降は中に竹かごを入れて袋状にした。

②休息中

ふ～　くそ暑いの～
わしも　裸になりて～え

【解説】堺には、かつて名水が湧く井戸が沢山あった。主なものは、金龍水（開口神社）、聾井戸（向陽町）、閼伽井（榎町向泉寺）、利休の椿井（宿院町）など。

③見物客　まつりは楽し



ねえねえ
あそこの若武者
ちょっと　いいわね～

そうかしら～
わたしは向うの男が
いいわ～

④檜物屋 「堺樽」ブランド

祭の弁当用に輪っぱを
20個用意してくれ
急げでたのむ！

お客さん
急に言われ
ても・・・

【檜物屋】檜や杉で作った薄い曲物（わげもの）を製造販売する店。曲物（綰物とも書く）は薄く削り取った材を円形に曲げ、合せ目を樺や桜の皮などで綴じて作った容器。中世後期には檜物師と並んで結桶師が現れており、大きな樽によって醸造業の大規模化が進んだ。**「堺樽」**は全国的に有名となり、『左海鑑』によると17世紀後半には148軒の樽屋があった。河口慧海の父も桶樽職人であった。

⑤書物屋 読み書きの盛行

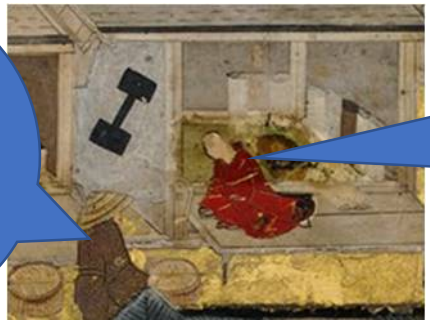
いらっしゃい
ませ

お探しの本屋
はここですよ

かたじけのうござる
倅らに蘭学を学ばせたいと
思いましてのう・・・

【解説】堺は元々出版が盛んで、南北朝時代には道祐の『正平版論語』、室町時代には阿佐井野宗端の『医書大全』が出版された。江戸期には寺子屋が広がり、町衆が子弟に読み書きを習わせ、連歌や御伽草子の出版も盛んになり、江戸初期には書物屋は1軒だったが中期には15軒に増えている。

⑥反物屋



おかみさん
アサリは
いらんかね
タコもあるよ

今夜は蛸の市だねえ
蛸をもらうかね
アサリもいいね～

【解説】「お祓い」の夜は堺大浜海岸で大魚夜市が開かれる。瀬戸内海各地からも漁民が集まり夜通し大篝火を焚いて海の幸を商う。蛸が最も美味な時季なので「蛸の市」とも呼ばれている。この時季の蛸は「祭蛸」、「おはらい蛸」といって食膳にあがる。元禄8年（1695）には、漁船591隻、漁夫1245人、問屋30軒、仲買人600人という記録が残っている。

⑦山之口筋で闘鶏？

【解説】江戸初期にタイから軍鶏が輸入され、闘鶏が盛んになり庶民の間では賭博の対象となることもあった。　坂本龍馬は死ぬ前に軍鶏鍋を食べたかった。

⑧行商人

【解説】『左海鑑』から行商が可能な職種を探すと、菓子屋、蝋燭屋、瀬戸物屋、煎茶屋、小間物屋、櫛屋、下駄（木履）屋、足袋屋、そろばん屋などがある。

⑨糸屋

【解説】**糸割符**は江戸幕府が糸割符仲間に独占的輸入権と卸売権を与えていた生糸輸入制度。当初、京都、堺、長崎の特定商人のみであったが、後に、江戸、大坂が加わった。最盛期には約200人の糸割符商人がいた。
堺では、生糸→染色→織り→生地といった**一貫生産**が行われた。

⑩蛸売り

【解説】この季節には、真正面風（まなかぜ）と呼ばれる南西の強い風が吹いて、大阪湾の蛸が最も美味になり、**縁起物の食材**になる。
茹でた蛸の赤が魔除けになるという言伝えもある。現代でも「半夏生（はんげしょう）」にはタコを食べる習慣がある。

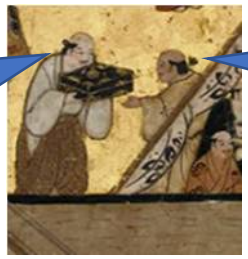
⑪薬屋

【解説】堺には元禄初め頃は薬種商が77軒もあり、江戸中期になるとさらに150軒余りに増えている。**小西家、高三隆達家**も薬種商だった。

⑫見物人と日傘

【解説】元禄初め頃、堺には傘屋が24軒あり、江戸中期には50軒になっている。他に菅笠屋、綿帽子屋などもあった。

⑬出前屋？



【解説】出前は遊郭から始まり世間に広がったと言われている。

⑭魚を捌く

【解説】大阪湾は古代に**「茅渟（ちぬ）の海」**と呼ばれ漁獲豊かな海であった。
元禄初期には、700人近い魚仲買人がいた。
千利休の屋号が「魚屋」であり、「とや」と読ませる通説があるが、「魚」を「とと」と読む例がなく、通常「斗々屋」を当てている。
利休は塩魚座の株を持っており、家業が魚屋であることは間違いない。

⑮勧進相撲と「相撲会」

【解説】九月晦日の御祇前の13日に「相撲会（すもうえ）」が行われる。式は午前4時に始まり、巫女の舞、舞楽、競馬十番、相撲十三番（うち三番は童相撲）等が続き、終わるのは午後8時。相撲十番は三韓退治の表現と言われている。
「相撲会」は「宝の市」、「升の市」とも呼ばれている。

【解説】「宝の市」」は、神功皇后が三韓貢物をもって市を立てたことに始まる。「升の市」は、市で升が売られたことにより称された。升は物の量を測るためのもので、収穫した米などを升に盛って神前に捧げることから「升の市」が始まった。

【解説】勧進相撲は寺社の造営・修復の費用を捻出するために開催した相撲。17 世紀中期には風紀上の問題から禁止されるが、相撲人気の点から元禄期には幕府も勧業相撲を認めることになった。
江戸期には女性の観戦は禁止であった。明治5年（1872）から観戦可能となった。

【参考】17世紀頃の堺の人口推移

・寛文5年（1665）	69，368人
・延宝3年（1675）	61，481人
・天和元年（1681）	59，521人
・元禄元年（1688）	62，860人
・元禄8年（1695）	63，706人
・享保16年（1731）	52，446人

＊以降、人口は減少
＊1600年頃の日本全体の人口は
　約1200万人
出典：角山栄著『堺−海の都市文明』
　　PHP 新書 2000

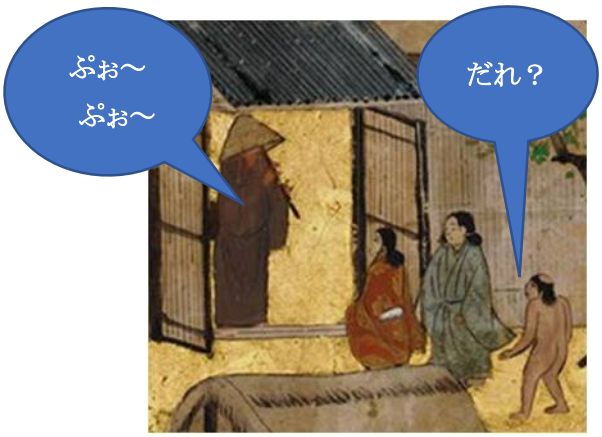
【参考】「百足（むかで）文」の暖簾

【解説】百足は、足の多いことから、客足がつく、おあしが入るなどといい縁起がよいとされています。また毘沙門天の象徴として知られており、百足の威力にあやかろうと商家の暖簾紋によく採用されている。

「本能寺の変」の前に織田信長に招待され、徳川家康も堺の町を見物しておりました。
昔の堺の町を楽しめましたか。
次に、庶民の目線から夏の風物詩を紹介します。

4. もう一度左隻を見る　庶民の風習を見てみよう

①虚無僧と素っぽんぽんの子供



【解説】虚無僧は中世末期に尺八を吹き乞食（こつじき）をした薦僧（こもそう）が前身。中国唐代の普化禅師が土中で鈴鐸を振り没したことに倣い、その音を尺八の音で表すことで修業した。普化（ふけ）僧ともいう。近世前期には、単衣着流し、簡略袈裟、浅い編笠を着用し托鉢修行した。近世中期以降には天蓋という深編笠を被るようになるので、この絵は近世前期の世相を描いたものということが判る。

【虚無僧の姿の変遷】当初は武士（浪人）だけが許され自由な旅の特権が与えられたが、後に無頼漢が身を隠す手段に利用し乱暴狼藉の弊害が続出した。明治になると明暗教会が設立されたが、虚無僧は宗教から離れ、尺八修行の方便や物乞いの手段となっていった。虚無僧の姿は時代により次のように変遷した。

＜初期＞

単衣着流し
簡略袈裟
浅い編笠

＜中期＞

居士衣
袈裟
天蓋
本則（免許状）
会印（所属証明書）
通印（往来手形）

＜明治～現代＞　明暗寺の場合

腰上げ
手甲
脚絆
草鞋
天蓋
「明暗」文字の
偈箱（げばこ）

②御御籤

【解説】占いの歴史は古代の亀トや「盟神探湯」に始まるが、現代のような御御籤は天台宗の僧良源が創めたと言われ比叡山延暦寺に「おみくじ発祥の碑」が建てられている。
境内の木に御御籤を結びつける習慣は江戸時代に始まった。当時、凶のくじを木に結ぶと厄が祓われると信じられていた。
なお、伊勢神宮では御御籤も賽銭箱も置かれていない。

③冷奴売り？

【解説】暑い夏の冷たい食べ物と言えば、冷奴、冷そうめん、冷水、麦茶、甘酒、ところてんといったところ。冷水に白玉を浮かべることもあった。

④砂糖水売り？

⑤甘酒売り？

【解説】甘酒というと「冬の飲物」のイメージだが、江戸時代の上方では「夏の風物詩」である。俳句の世界でも夏の季語である。
江戸では当初「冬の飲物」だったが、後に、夏でも売られるようになった。
現代、「飲む点滴」といわれブームになっている。

⑥ところてん売り？

【解説】心太（ところてん）は奈良時代から食されていたことが正倉院の宝物中に記録されている。「こころふと（心太）」が「こころてい」→「こころてん」→「ところてん」に転訛したといわれる。関東は酢醤油、関西は黒蜜という伝統がある。